

## 巻頭言



人間看護学部 学部長

あま さ きょう こ  
甘 佐 京 子

2016年は、国内外において重大な出来事が続発した1年であった。欧州ではテロが立て続けに発生し、イギリスではEU離脱が可決され自国民がその結果に驚き、さらに、米国ではトランプ氏が次期大統領に選出され世界中で大きな話題となった。国内においては、比較的地震が少ないといわれてきた熊本県で震度6強の地震が発生し大きな被害が生じた。また本来、病者や弱者を擁護すべき医療や福祉の現場で、痛ましい殺傷事件が複数件おこっている。一方、リオオリンピックにおいて、日本選手団はメダルラッシュに沸き、中でも陸上400mリレーでは、米国チームを破り見事銀メダルという想定外の輝かしい出来事もあった。このように、私たちは、日常の中で生じる様々な想定外の結果に、歓喜したり、愕然とした思いを募らせたりして日々を送っている。

さて、「研究」はどうであろうか。量的研究では演繹的に仮説を構築しデータを集め分析を行う。その結果が想定通り(仮説通り)であれば安堵し、想定外の結果に研究者は頭を悩ませる。逆に、質的研究においては、データを帰納的に分析し、想定外(予想外)の結果が抽出されれば、研究者は身を乗り出し、心を震わせることとなる。『看護』は「科学」であるが、「人間の生活」に付随するものであり、自然科学と社会科学の両側面をもつ。どちらが優劣というものではなく、対峙する現象により研究者の科学的な立ち位置や研究方法は異なる。今年度も『人間看護学研究』に多くの論文が投稿された。それぞれの研究者が導き出した「想定内・外」の研究結果を、皆さま方に是非吟味していただきたい。